

岡田 康司（おかだ やすし）

学部長、教授

専門分野／サービス事業論、ベンチャービジネス論



一橋大学卒業。日本長期信用銀行（通産省出向、大蔵省特別研究官などを経て）事業開発部長、流通科学大学サービス産業学部長、大阪産業大学大学院教授を経て、平成 21 年現職。また、一橋大学、東京女子大学などでも教鞭をとり、(社)地域経済総合研究所（旧・自治省認可）理事長。

著書：『虚業が実業になる日』（東洋経済新報社）、『長銀の誤算』（扶桑社）、『されど護送船団は行く』（講談社）他。

私の「芸能経営論」～私が芸能界を好きなワケ～

私（が大学に奉職する前）の銀行員時代の“ジマン”は、もう 20 年くらい前の話になりますが、NHK『紅白歌合戦』出場歌手の選考委員になったことです。政府の審議会委員になることはあっても、この選考委員のほうが私には断然ジマンです。

紅白歌合戦は、当時は視聴率で他を圧して注目を浴びる年末の大イベントであり、選考の経緯・結果や私の名前は新聞や週刊誌に紹介されました。

今はこんな選考方式をとっていませんが、当時は芸術家や評論家など 6 名から成るいわば各界の名士から成る厳しい会議によるものでした。そんなところで一介の銀行員つまりサラリーマンが末席をけがすことができたのは、私が銀行の調査部で「世間の人を重要視しない」産業やそれを構成する企業に焦点を合わせ、他の大産業・大企業に決してひけをとらない経営をしているという著作を発表したり、そんなテーマの TV 番組に出演したりして、芸能界にも目を向けていたからです。

「職業に貴賤無し」とはいいながら、世間は芸能界を“一ランク下”の存在として見る風潮が大勢を占めていました。そんな偏見と闘ったのが私の「芸能経営論」です。

会社はさまざまで、世間から疎んじられる会社もあれば、尊敬され羨ましがられる会社もあります。今や芸能界は立派な産業になっていますが、とにかく世間は“陽の当たる”産業に目を向け勝ちで、経済界にはかつての芸能界のように軽んじられ、虐げられ、時には無視されている産業や会社があります。しかし、そんな産業にも会社にも、汗と涙と素晴らしい感動に満ちた人間ドラマがあります。それらがやがて“セレブ”な大企業に成長し、有力産業の一翼をになう日が来るのです。

そういう企業や産業、とりわけその人間ドラマを研究するのが、“私の好きな”経営学です。

ハウツーものより遠方指向性を持つ読書を

ここでは、わが学部がめざしかつ標榜している「実学」と「読書」、関連して図書館について述べます。

さて、わが経営学部では、多彩な体験、研究分野を誇る教員が深い内容の授業を展開しておりますが、その共通したコンセプトは『実学』の標榜ということになります。

それは、「現実・具体的・実践的」というような言葉に象徴されるもので、記憶力重視ではなく、「有徳有為」な、社会に真に役立つ人材の養成であり、現実を直視した具体的・実証的な学問をめざし、立派な社会人を育成しようということです。

しかし、近年多くの大学で、昨今「役立つ学問」とか「実学」を標榜するようになっていきます。その背景には、かつてイギリスのサッチャーが大学教育に対して「職業教育としては役に立たない。社会とミスマッチ」と喝破したような事情がわが国にもあるからでしょう。大学教員にそんなコンサルタントのようなことを求めるのは酷といえますが、他方、卒業生の受け入れ先の企業側も心得たもので、大学生には「会社に入ったら叩き直すから体力や根性さえあればよし」という方針で採用します。したがって学生は遊びまくり、“社会に出たら勉学に励む”というなんとも奇妙な状況が罷り通っています。

「実学」となると経営学部のための読書のためには、経営の基本的な書籍や実用書でよしと誤解されがちですが、しかし社会の現実はそのなにごとにも甘くなく、闇雲に野原を突っ走るだけの“オバカ”に将来は無いのです。広く世界を睥睨し、過去の経験や知恵から学ぶ、つまり空間的・時間的に広い視野無くして、折衝はできないし、浅くて軽い人格識見では部下を従えることもできません。

実態の無い未知なる遠い存在に魅力を感じる知性、つまり“遠方指向性”を持つことが将来ある若者に期待されるのです。ブランド品とかオタク商品を嗜好する大学生では、「知の過程」へのアクセスが乏しいといわざるを得ません。歴史・地理・哲学を含む深みと広さを持った本に満遍なく巡り会うこと、ハウツー的な生命の短い本ではなく、時代の風雪に耐えた古典的名著を読むことが必要となるのです。

そのためには、わが国には多数の図書館があり、購入の必要もありません。まず王道は、「国会図書館」。これはわが国唯一の国立図書館で、納本制度に基づく国民からの出版物を中心に蔵書がありほとんどの本は閲覧できます（不肖私の出版した著作ですら“ハードカバーから漫画まで”全部揃えられていてちょっぴり嬉しい）。資料そのものが閲覧できる「電子図書館」では、貴重書や明治期刊行図書を電子化して提供、明治期・大正期刊行図書を収録した画像データベースでは約143千冊を収録しています。

分野を絞ると、各地にある専門の図書館も侮れません。例えば、豊臣秀吉が各大名に宛てた山ほどの手紙を擁し、その署名や押印が時とともに変化していることから秀吉の考え方の深さを窺える郷土図書館とか、週刊誌をはじめとする通俗的な雑誌が「雑誌記事索引総目録」として整備された大衆文化のシンボル「大宅壮一文庫」などがあります。

かくして、一見すると経営学からは距離を感じるような本でも気楽に手に取る知的風土の涵養が、深い教養に基づく「実学」への第一歩といえるのではないのでしょうか。